

# 出張日記

八月二十七日。槌井の神楽を調べに出張。ここの神楽はこれで十回以上の出張になるだろう。他の神楽に比べると、この回数は全く異例である。今度は、囃子について三、四の疑問を確かめるのを付け足しにして、シネマ（８ミリ）を撮るのが目的である。シネマの方の臨時助手は混屋甲三君が買って出してくれる。

十時三十分仙台発、東北線青森行に乗る。約一時間半の後、川手で下車。有間行の軽便鉄道に乗る。零時二十分発車。山の中の狭い野原を縫うようにして走る。機関車は相常に努力しているらしいが、まあ威勢のいい人力車程度の速度だ。今朝の豪雨の上がつた空は気持ちよく晴れて、所々に白い雲がいかにも秋らしく浮かんでいる。狭い平野だが、山際までずっと稲田が続いている。稲の穂はもう垂れている。今朝の雨で水が出たので畔際に水が溢れている。散在する農家。時々物持らしい家の真新しく白い壁が、陽をまぶしく照り返す。稲田の合い間には桑畑とか甘藷畑とか、煙草やとうもろこしの畑がさまざまに続く。乗客は七、八人。狭い客車もそう窮屈ではない。軽便のせわしくカチカチいうレールの音も、しまいには耳慣れて来て眠くなる。省線の駅で買って来た弁当を開いて食べる。今まで前に眠そうに坐っていた男が、我々が食い出すと、唾をのみながら横目で見ると、何だか見たような顔だ。僕は前に度々この軽便に乗ったことがあるから、その折に二、三度逢っている男かも知れない。

名もない駅。二十五、六の若い台湾系の顔をした駅長が、出て行く軽便の車掌に向って、鹿爪らしく挙手の礼をする。応答する車掌も若い。十八か九だろう。

二時十分、十谷と言うところで下車。ここで僕のつもりでは槌井行のバスに乗れる筈だった。下りて訊ねると、もうバスは五分ばかり前に出発したあとだと判った。どうし

てこの汽車の着くのを待っていないのか、と言うと、僕の訊ねた自動車屋の男は

「この軽便とは連絡すねえんだおんなあ。越切から連絡するツから」

と言う。越切と言うのは東北線の駅である。前とは事情が変わって来ているらしい。ガソリンの統制でバスの回数も半減したというのだ。自動車屋の男はそう言いながらしきりにボロ自動車の手入れをしている。車はエンジンも埃まみれだし、車体のカヴァーも凹凸で傷だらけだ。

「この自動車は動くかね」

と言うと、その男は別に憤慨もしないで、

「ハア、動きます」

と答える。

「どうだい。こいつで今出て行ったバスを追っかけて見ないか」

「そんだねす、ンだが今井まで行かねば追つけねえかもしツねえからねす」

今井と言うのはもう槌井に近いところだ。それじゃあ槌井まで行ってしまった方がいい。

「一体、槌井までいくらで行ってくれるかい」

「んだねす。岸水まで二ずう円だから、まあ八円だねす」

八円！こいつは馬鹿げている。バスなら五拾銭で行く。それは現在でも恐らく変わらない値だろう。この次のバスはと訊ねると、六時までないと言う。これにもうんざりした。「どうしよう」と僕と甲三君の眼は期せずして待っているに適當なところはないものかと、その辺を物色する。十軒ばかりの家並みで小料理屋みたいなものが一軒あるきり

だ。そんなところへ上る気はない。仕方がない、それなら歩けるところまで歩こうと、リュックサックを背負い直して歩き出す。駅前を離れるとすぐ切通しがある。

「槌井まで歩いちゃうか」

と元気なことを言い交す。相当な崖の上に手製らしいペンキ塗りの汚らしい看板の出ている家が藪の間から出ている。看板には「ゴム靴修繕院、院長ゴムケン」と書いてある。「院長ゴムケン」は振るつてると笑って行き過ぎる。何だか足が非常に軽く思える。間もなく鑑川。今朝の雨で水量が増して、白い泡を渦に巻きながら恐ろしい勢いで流れている。水の色は茶色に濁っている。橋を渡って十谷町を過ぎる。十谷町の家並が後に見えなくなる頃から道はだんだん登り気味になってくる。空はもう雲一つないほど蒼く澄み返っている。道は山の中へはいつても平坦ない道だ。天気は良いし、素晴らしい遠足のような。山の中を幾重にも曲りながら道は登って行く。両人は自動車も人もロクに通らない道をトコトコ登りながら、何や彼やと議論をする。議論もはてしないように道もはてしない。もう大がいに頂上へ来ただろうと言う希望は、新しい山の腹の際が向うに見えるたびに裏切られる。四時頃やっとトンネルに着く。

このトンネルが道程の半分だ。峠の頂上である。記念撮影。槌井の方からバスが来て通って行く。トンネルを越すと海が見える。海辺は見えないが、海辺と思える辺りまで山が重なり合って、山ばかりだ。下りは早い。山陰になって陽が当たらないと、寒いくらいに体が冷える。向かい側の山の鼻が陽に当たって明るく見える。早くそこへ行きたいと焦る。足は草臥れて来て一定の速度以上にならない。口の方の議論も足の草臥れを反映して蹠踉そうろうとしてくる。時々唸るように重い息を吐きながら、沈黙し勝ちになる。陽当

りの場所は益々遠退いて行く。陽が落ちての山の作る蔭の方が早い。ようやく人家のある辺りに出る。もう日は暮れ始めている。部落の中の谷川の傍の道には、五、六才から十歳ぐらいまでの子供達が二十人近くも群れている。吾々が通ると後から何か言う。草臥れているのでそんな相手をするのも面倒くさい。部落は間もなく切れる。道はまだ下り気味。槌井はまだなかなかのようだ。

道は再び山の間にはいつて行きそうだ。夕暗に黒く見える森が行く手に見える。コンクリートの小さな橋まで来て一休みすると、もう意地にも動けなくなってしまう。時計を見ると六時五十分。四辺はすっかり暗くなる。夜の冷気と水気が気持ちの悪い程体にこたえて来る。がっかりして橋にもたれていると、突然歩いてきた方の山際にバスの灯が見える。その現れ方は吾々の気持ちに伝えてくれるようでもあり、またこれまで歩いたのがまるで無駄だったと言っているようでもある。バスは迂るように下りて来る。ヘツドライトと上の方の青い二つの光が救いの火のように揺れる。バスが近づくとワイワイ大声を挙げてとめて乗る。運転手は、

「槌井はもう一息ですとオ、あんたたづ、頑張れなかつたのすかや。」

僕はこのバスが、頂上のトンネルのところまで記念撮影をしていた時に通ったのを思い出す。運転手は吾々を知っているのだ。吾々の乗った所から槌井まで拾銭である。二時過ぎから六時五十分まで五時間近い徒歩で、我々は兎に角、槌井から拾銭の区域まで辿りついたのだ。

七時過ぎ、見知り越しの槌井の町に着く。この地方は防空演習をやっている最中で、何方を向いても暗い。その中を通って町端れの松原の中にある馴染の旅館につく。あと

はもう旅館の者への挨拶も簡単に、湯にはいって飯を食って寝てしまえばかり。

八月二十八日。晴。七時起床。朝食。宿で昼食の握り飯を拵たくわえてもらって出る。今日は神楽をやってもらおう打合せをしに大野村呉田の益本進のところへ行くので、甲三君には自由行動をとってもらおう。

樋井を十時に発つバスで金堀に行き、下りる。もとはここから呉田の大野神社前の海岸を通って走って行くバスがあった。しかし今ではこれはガソリンのために廃止になった。金堀から海岸伝いに歩く。久しぶりの海の風。磯の臭い。茶色や緑色の藻が沢山汀に打ちよせている。川浪という部落をすぎて目的地の呉田にはいる。以前、呉田へ来て一週間ばかり頑張ろうとしたことがあった。木賃宿でもいいから宿屋をと言うと大野神社社掌の益本が案内してくれた。呉田へはいる手前の右側にある海岸の前の廃屋のような軒家だ。二階の座敷を見せてもらったところが、壁は荒塗りの泥をむき出しで、座敷は目も判らないほど黒ずんだ畳で、座敷全体が躓つまずきそうに傾斜している。入った途端に異様な臭気が鼻をついた。私は辟易へきえきして引き返した。そして益本の家に厄介になった。その家がまだある。未だ宿屋をやっているのか知らずと思つて眺めると、二階の座敷へ洋服を着た男が上がって行った。やっているどころか、客があると見える。大野神社に着く。益本進は神社の前で蓆を干している。家にはいつて板の間上がる。息子の健の嫁が来て座布団とお茶を出す。親父の進はなかなかやって来ない。座敷へは向方側から上がっているのだが、足を手拭いではいたたりそこらを片付けたりして愚図愚図している。その態度は以前と一向に変わらない。大体手紙で来意を伝えてあるし、ぼんやりやって

来たのではないと、僕自身も以前と同じように腹が立って来る。

五十ばかりの中婆がせかせか入って来る。婆さんは僕には眼もくれず、遠慮なく炉辺に坐り込んで煙管を出して煙草を呑む。吸い殻をはたく音が何となく落着かない。婆さんはいらいらしたように進の姿を眼で追っていたが、進がやっとやって来て炉傍ろばたに坐ると、煙管を思い切って炉傍に叩きつけて、せき込んだように言う。

「ンでは、それでもらうていぎす。相場の如何のとハア、言ってもいらねえ」

益本はニヤニヤしながら、

「おらはハア、如何でもえがす」

と受ける。婆さんは眼を光らせながら、足を運ぶ都合もあるから言いなりになると言うことを早口に言う。益本は僕の前の茶碗に茶を注ぎ足して、

「先生。まあ一服御座んない」

と僕にすすめて、そのまま座を立つ。婆さんも煙管をしまつて続く。兩人は次の間に行つて天井から繭の籠を下す。婆さんの持つて来た秤はかりでそれをはかつて婆さんの袋に入る。真綿も一籠ばかり。婆さんは懐中から拾円札を出して十五円ばかり払う。あとは黙々と荷造りする。

益本は僕の前に来て坐る。茶を入れる。炉の火の煙が真つ直ぐにこちらに来る。煙くて堪らない。僕は仙台からの土産を出す。

「先生、何っしゃ？今度は写真とりに御座ったのすか」

「ええ、そうです。写真は写真ですが活動写真です。あの動くやつ……」

「ハア、活動写真すか」

と益本はこの時はじめて僕の顔を見る。三角の眼が意外そうである。益本は不意にまた立上る。次の座敷へ行って何か片付けたり、縁側に出て空を見たり、膝の塵を払ったりしている。婆さんは短く挨拶して大きな荷を背負って出て行く。やっとまた座に戻って来る。僕はそれまでポツネンとしている。進は火をいじりながら、

「ソンでは先生、舞の手振りなどを写すのすか。……。ンだが、農家は忙しくて、人数が集つかどうか。一人や二人ではハア、わかんねえ」

わかんねえと言うのは駄目だという意味だ。それから僕と進とのほんとうの相談がやっとはじまる。息子の健が帰って来る。防空演習で警防団のユニホームを着ている。昼食。台所から鯉鮓が出て来る。僕は握り飯を一つと鯉鮓一杯を食う。残ったもう一つの握り飯は、健の子供の鼻汁をたらした汚れ顔の子にくれてやる。昼食後、進と健と三人で相談する。僕は、四人人数が欲しいが集まらなければ貴方方二人でもいいと言う。健は石子の大将を呼んで来るというと、進は言下に反対した。

「わかんねえ、石子だって忙しいに、わかんねえ」

健は黙っている。日は明後日三十日にすると言うことに決まる。僕は持って来た囃子の記録を拡げる。疑問のところを訊ねたいのだが話がなかなかそっちに持っていかれない。一寸話がうるさくなると進はじきに立上って台所へ行って小さい子供達を叱ったり、庭へ出て下駄をはいて何処かへ行ってしまったりする。健の姿も見えない。僕はまたポツネンとする。さっきのとは別な五十過ぎた婆さんがやって来る。若い女を連れている。

庭にいる進に大声で話しかける。繭の話らしい。進が、

「いーま、平口のおが（おっかあ）が来たとこしや」と言うと、婆さんはがっかりした

ように、

「おらあそれで心ペえだでハア、手紙コ出して……届いたですべ」

「届かねえ。なあに、手紙じゃわかんねえ。こウこまで、まる一日半かかるてば。来る方が早えから」

「ンだすかあ」

と婆さんはえらくがっかりしたようだ。婆さんと娘は板の間に上って来た。僕は記録を片付ける。そこへ羽織袴の半白の老人がやってくる。これも遠慮なく上り込んで炉傍に坐る。益本が挨拶に前へ坐ると、老人は懐中から何か出す。何かしきりに話をはじめ。進は奥へ行つて眼鏡を持って来る。僕は遂に諦めて帰ることにする。二時一寸前だ。

今金堀に行けば槌井行の自動車が二時半に通るはずだと進が言うのを本当にして益本の家を出る。かなり急いで二時半一寸前頃に金堀につく。バスの停留所できいて見ると、今は二時半のは無くなったと言う返事だ。次は五時だと言う。糞！昨日の二の舞だ。歩く。そこから槌井まで小一里ある。海岸沿いの崖の上を行く山道だ。もつともバスの通る道だから悪い道路ではない。陽に直射されて、昨日と今日の二日で腕なども見違えるように焼けた。山から海岸の崖への傾斜の間に農家が五、六軒ある。こんなところにも人が住んでいるのかと思われるような場所である。

約一時間の後、宿に帰る。四時近い。甲三君は留守。この町の磯谷氏を訪ねて行ったらしい。草臥れていて仮睡する。灯火管制だと言うので早く夕食。暗い中を甲三君が帰って来る。

「どうでした」

と言う。

「ウン。前のおりだ。腹の立つことおびただしい」

と答える。暗闇で甲三君は飯を食う。南瓜だと思って食ったのがトマトだったりして吃驚した変な声を出す。寝る。夢うつつのうちに非常警報をきく。

**八月二十九日。** 今日一日は暇だ。八時起床。朝食の後、シネマにカットの番号を入れる数

字の紙を作る。十時、宿で例の握り飯を作ってもらって甲三君と一緒に出る。

天気は素晴らしくいい。久島へ行こうときまる。槌井の町を横切って岬の方へ行く。相当に広い道が岬の鼻っ先へ出て左に曲がっている。岬でその道から南側の海へ下りる。険しい崖になっている。細い道が杉の木の根にぶつつかるようにしてガギガギと曲って下っている。熊笹を掴えたりして下りる。下りたすぐの足元から海の中の久島へコンクリートの防波堤が出来ていて歩いて行かれる。左側は太平洋の外海からの波が騒がしく立っている。防波堤を距てた右側は鏡のように静かで、海の底がはっきりと見える。防波堤は幅二間半ぐらいの簡単なものだが、これだけで海の内外の姿を截然と区別している。防波堤の真ん中に汚い服を着た男が釣りをしている。獲物はいなめが一匹らしい。彼は餌をつけて紐を遠くへ投げると、ポロポロになった雑誌を開く。雑誌は『キング』。島は周囲が切り立ったような崖で、その崖の上から頂上にかけて木が繁茂している。丁度型に入れて盛った飯へパセリを処狭しと植付けたら、こんな風になるだろう。防波堤が久島へ届いたところは崖の下に少し砂利があつて汀めいた景色を作っている。崖の下に、幅一尺に高さ三尺ぐらいの小さな碑が立っている。これもコンクリート作りらしい。

表に銅の金具がはめてあって、それに「工費十二万六百元」と書いてある。他には何も書いてない。この町の有力者の磯谷氏に聞いたところによると、この工事は大変な難工事だったらしい。途中で基礎工事が波に浚われたことが二度ばかり、工事で死んだ人が六人、或る時にはこの工事をめぐって疑獄が起きたりしたこともあった。かつて僕が知っていたのは、波に浚われて中絶した状態の時だった。それが知らない間に兎に角出来上がったのだ。しかし「工費十二万六百元」とあってあとに何も書いてないのを見ると、貧しい槌井の町民にとってこの十二万六百元と言う莫大な金高が余ほど恨み骨髄に徹したのだろうと思われる。

右側の崖下へ廻って岩に腰掛ける。湾内の沖に鯛の生簀が三つ四つ浮いていて、その上に鴟が鳴きながら群れている。槌井町寄りの海中には海苔の粗朶が植えてある。磯谷氏の話によるとこれは防波堤のお陰で植えられるようになったと言うのだ。握り飯を出して食う。海の上の正午の陽の照り返しが眩しい。槌井の町が春の日のように霞んで見える。食後、尚も右へ廻って汀の中の方に出ている岩へ飛び移って島を見上げると、崖のすぐ下では判らなかつた道がある。これをねらって崩れたところを登る。すぐ小道に出る。そこから頂上へ上がるのは容易だ。頂上には杉木立の一町四方ばかりの平らなところがあつて、真ん中に小屋の朽ちたのが一つくずれている。外海側へやや下ると間もなく高い絶壁の上へ出る。目もくらみそうに高い。潮風がごうごうと絶壁にそって吹き上げて来る。近くに出ている名前の判らない木の真っ黒な枝を伸ばしている間から、下の外海の波が岩を噛んで、眼を射るように白く泡を吹いて荒れているのが見える。眩みそうな高さで慄えるような冷たい潮風とごうごう言う音でそのまま立って覗いていられ

ないような気がする。すぐ内海の方へと返す。打って変わったような内海の穏やかさ。途中で差し出している木の枝も葉の色も、内海もその向方に見える山も、外海側とは対照的なごやかさと繊細と色彩的なものを持っている。

もとの道を下りる。崖下を左へ廻って見る。切り立った崖の肌は生々しく赤い。岩が沢山ある。海岸に踞ったの、海の中へ突っ立っているの、平たいの、尖んがったの。岩の茶色黒褐色を外海の波の立ち騒ぐ紺碧の色が取り巻く。二つの岩が三十坪ばかりの広さを囲んでいる。その口にもう一つ低い岩があつて入口を二つにしている。外海から波が押し寄せて来る。先ず右の方からどつと水は流れ込む。外の波が左の口へ行く頃には、右の口からの水は中に一杯になつて激む。中の方から出来る様々な水の動揺。ためらいのひと時が過ぎると今度は外へどうと出る。左の方から入って来る水はそのまま右の方へはしる。そこに強い流が出来て中の方に渦を作る。水の引いたこちらの岩の肌には小さい滝が方々に出来る。出る時の激しさ。一杯になつた時の恐しい重量を思わせる水の動き。そういう動きの上に浮かぶ様々な小さい波と泡と水の皺と渦。何かしら人の心の動きに似たところがある。この、中の水と外の波との往来は、我が心と世の中との、主観と客観のとの交流にも似ている。

防波堤に出る。杉木立の岬の崖をよじ登つてさっきの広い道に出る。行く手に下の方に槌井の小さい町が見える。警戒心の表徴のような火の見櫓。浜の近くに造船所がある。鯉船の竜骨が半分ばかり出来ている。幽かなノミの音が静かな空気の中を伝わって来る。のどかな景色だ。雲一つない空に輝いている太陽であるが、少しも強烈ではない。北国の秋の陽は非常にマイルドだ。

四時頃宿に戻る。夜は磯谷氏が来て話し込んで行く。

八月三十日。曇。六時半起床。仕度して宿を出る。弁当は相変わらず握り飯。七時半の自動車に乗って金堀へ。そこからまた歩く。道傍に小学校がある。この辺の小学校は二十日からもう始まっているのだ。丁度朝礼式だ。御真影に向って職員生徒一同が最敬礼する。バスが少し遅れたので、樋井から来た女の先生は駆けたが間に合わず、やっと校門のところまで皆の最敬礼に合わせる。児童達はまだ三々五々通りの向方からやって来る。朝礼式が始まっていると言うのに、遅刻の者達はどいつもこいつも皆平気だ。小学校が崖で見えなくなるところまで来たが、まだ道の向方から生徒が続々とやって来る。汀の石崖の上に立って汀を覗き込んでいる女の児達がある。一人の女の児が石崖をよじ上って来た。昆布を拾って来たのだ。女の子は昆布をかじりながらやって来る。千切って大きい方はカバンの中へ入れる。坂道の上の方から三、四人の男の子達が何かしきりに議論しながらやって来る。中でも背の低い霜降りの洋服を着たのが最も熱心だ。しまいは夢中になって、瘦せた子供の腕をとらえて道の真ん中に立止まってむきになって議論する。学校などはてんで頭がないようだ。僕は通り過ぎながらどなる。

「こら、わらしやど！早く学校さ行げ。もう朝礼式が始まってるぞ」

子供らは吃驚してこちらを見る。僕の出来損ないの方言がおかしいのか、一斉にゲラゲラ笑う。坂を登って振り返ると、まだ子供達は立止まって笑っている。

大野神社に着く。益本が出て来る。

「まあ、一服御座んない」

と板の間の方へ上げようとする。一服御座っているときりがないので吾々は上り端に荷物を下すと、すぐ撮影機と三脚を出して山の上の神社の境内に行く。場所を調べ、カメラのアングルをはかってカメラの下から二本のテープを鋭角に開いて張る。下へおりて益本の家に帰って、さあ支度が出来たから頼むと、猶予なくせき立てる。健は三人剣舞をするには如何しても石子の大将を呼んで来なければならぬと言う。進はまた言下に否定する。

「石子だって忙しいに。わかんねえ」

と言う。僕は三人舞も欲しいので石子へ人をやってもいいではないかと言うと、進は「忙しいところを来てもらえばハア只でも帰されねえ」

僕はこの時になってやっと進の心が判って、この野郎と思う。僕から出る報酬のうちから、そういう臨時の人間に割いてやるのが惜しいので、ぐずぐず言っていたのだ。

「その人には、それでは別にお礼を上げましょう。健さん、一つ呼びにやって下さい」「えがす」

と言って健は出て行く。進は黙っている。僕は顔をしかめたまま境内に駆け上がる。しばらく待っていると進や健や益本の隣の男がやって来る。健は石子の神主の話から、この隣の男にも話をつけたらしい。畳を下から運んで来る。定めた場所に六畳を敷きつめる。それからぼつぼつと太鼓を持って来たり衣装箱を持って来たりする。ようやく撮影がはじまる。先ず健が踊る役になって舞の色々な基本的な型を撮る。太鼓は進が打つ。僕は手帳に控えをとりながら一区切りごとに神楽の方と打ち合わせをして番号を撮る。甲三君もヒルムの入れ替えなどで一休みも出来ない。今度は進が踊る役に廻る。進は流

石にうまい。面の切り方、囃子からのリズムのとり方など兎に角うまい。この神楽で進の右に出るものはない。次で、彼は一人剣舞をする。次には姫舞。これは隣の男がやる。この鬚だらけの実にむさくるしい男が、面をかむると兎に角女の恰好がつく。不思議なものだ。この男は恐ろしくリズム音痴だ。鈴の振り方など太鼓とまるで合わない。見ていると肩がむず痒くなるようだ。しかし写真には構わないだろうと思って我慢する。

昼飯。宿の握り飯を出して見ると恐ろしく大きい。今朝握り飯は数を倍にしてくれただのんだのを、一つの大きさを倍にと受け取ったらしい。またこれでは倍どころではない。横から口を開いても一寸歯が届かない程だ。例によって台所から何か出て来る。今日は醤油の煮汁の中に鯉鮎粉をこねて小さく千切つて入れたようなものが井の中に沢山入っている。食って見ると味も素気もない。鯉鮎粉の千切つたのが変にニチャニチャと歯へ付いて気色が悪い。進は、「はつと」と言うもので、昔は伊達様が人民にこの鯉鮎粉のこねたのなどは食っては不可いけないと禁じていたので、そう言うところからこの料理が「法度」と呼ばれるのだ、と説明しながら食わせる。人民の食えなかったものにしてはこの恐ろしい不味さがたとえ様もなく皮肉だ。甲三君は余程腹が減ったらしく、握り飯を平げつつ井をも平げる。井が空になったと見るや、たちまち台所からお代りが来る。僕はこのお代りが恐ろしいので用心しながら食っているのだ。甲三君はこの時すでに二つ目の握り飯を平らげつつあったので、それを食ったあとでは流石にこのお代りの征服は出来兼ねたらしい。意を決しようとするところ二、三度あったらしく顔色が動いたが、遂に僅かに汁を少しすすったのみで中味の固形物の堆積を眺め下ろしながら憚然として箸を置く。僕は例によってお代りは固辞し、余った握り飯は子供にくれてやる。

食後直ちに山に上がる。こうしていれば否応なしに彼等もよって来るのだ。再びはじまる。鬨いの型を撮る。石子の神主がやって来る。石子のに早速着付をさせて三人剣舞をやる。及び三人素手舞。そして石子のに、進がやったのとは別な一人剣舞をやらせる。これで撮影終了。雌子の疑問はこの男や健に訊ねた方がいいと咄嗟に思いつく。後片付けがすむとすぐ健と石子のと隣の男をつれて神社の拝殿にはいる。疑問を聞く。実に簡単に答えてくれる。名前で思い出せないのが一つ。その他はみな片付く。健は親父とはまるで違った男らしい。さばさばとして三人と共に山を下りる。

磯谷氏が今日の仕事の見学かたがた、この近所に釣りに来たと言って顔を出す。実は昨夜磯谷氏にお暇だったら来て下さい、貴下がお出でになると連中が熱心にやるでしょうからと半分頼んでおいたのだ。

「もう済んだのですか」

と一寸残念な顔をする。お礼の気持ちも含めて、今日は実にスムーズに行きましたと僕は答える。進にお礼を拾壺円やる。進は受取る時「ンですか」と声を低くして少し笑う。僕はすぐ皆のところへ引き返す。炉傍でお茶を呑む。

進は一町ばかり先の池で鯉を釣っている。釣狂の磯谷氏はそれを釣って見たくて仕様ががないのだが、今まで進はどうしても釣り糸を入れさせなかった。しかしこの頃、六年前に入れた鯉も大分大きくなったので、ぼつぼつ色々な人に試みさせて見ているのだ。一向に釣れない。これは進にとっては悪くないことなのだ。兎に角大きなのがいることは確かだ。この間県庁の或る役人がやったところが、この人の糸には不思議によくかか

「半日でこんなのを」と言つて、進は二尺ばかり手を拵げて見せる。「四本釣つた。」  
「いやいやどうも、その調子で釣られたでエは堪んねえ」

と進は言う。進はいずれ槌井の人達にも宣伝して釣堀みたいにして金をとるつもりらしい。なにしろ彼の言うところによると、大沢から鯉の子をトラックで運ばせて入れたので、四百両もかかっているからいつまでも遊ばせておくつもりではないと言うのだ。それには顔のきく磯谷氏などにも良くしておいた方がいい。それと鯉がなかなか釣れないのに安心して、今日は磯谷氏に向つて釣つてみてくれと言う。磯谷氏は蛹をもらつて来て池に行く。吾々も行く。

相当な広さの静かな池だ。前は大野神社の山で境内の大きな杉の木立が天に聳えている。後方は田圃で、近くにある小高い山にゆるく傾斜している。田圃は稲が実っている。山の木の陰に子供がいて、さかんに雀をおどして、石油缶を叩いてワーワー言う。子供等はかなり狂暴に叫んでいるらしいが、それがこうして静かな池の端に踞んでいると一向に喧しくない。桑畑にいる女の子が大野神社の前を通る老婦に呼びかけて何か言う。綺麗な声でまるで歌うような調子でやりとりする。老婆の返事も歌うようだ。何と言っているのか判らないが、話される言葉でこれ程美しい抑揚の会話は聞いたことがない。静かな池を越えて聴こえてくるこの歌の会話にしばらくきき惚れる。

日が次第に低くなつて来る。磯谷氏の浮木は一向に動かない。進が向方からやつて来る。

「ドンです。磯谷先生」

「うむ。一向に食わんね」

「ンですッペ。かからねえだオンなあ」

「こりゃ、一週間ぐらい蛹で慣らさなけりや駄目だね」

これには進は生返事をする。進にとっては鯉を特に馴らすなんてことは凡そ無意味なのである。進は帰りかけて呟く。

「ええ塩梅だ」

これが運悪く磯谷氏の耳にはいる。流石の磯谷氏も一寸顔色を変える。進の後姿を見送りながら、

「いまましい、あんなことを言いやあがる。ああ言う奴だからねえ」

暗くなったので益本の家に戻り仕度をして出る。一行は吾々二人と磯谷氏とその甥の四人になる。七時半に金堀を通る槌井行があると言うので、それに間に合うように行く。ところが金堀の近くまで来ると、防空演習の非常警報が鳴り出した。これではバスは消灯して何処かで一時間も停車しているより他はないのだ。バスは諦めざるを得ない。遂に槌井まで歩くことにする。しかし何しろ腹が減って堪らない。金堀で真っ暗な中で餡パンを買う。菓子屋は餡パンと言ってよこしたが実は餡パンではない。そうでないことは確かだが、暗いのでどう言うものかよく判らない。

「闇取引でやあがるなあ」

と言いながら食う。甘食と言うのに砂糖をまぶしたようなものらしい。兎に角食えることは食える。四人で分けて食いながら歩く。恐ろしく足下が暗い。崖の下の海がほの白く光って見える。吹きつける風が寒い。道の上の方から、もやっと黒い影が下りて来る。遅帰りの農夫らしい。吾々四人のやかましい下駄の傍を音もなく行き過ぎる。一昨

日歩いた時はいい道と思ったが、こう暗いと時々躓きそうになる。成るべく足を挙げて歩く。木立の中へ入ると一層暗い。鼻をつままれても判らないほどだ。一体どの辺まで来たのか見当がつかない。槌井の住人である磯谷氏達にも判らない。

「狐にやられたんじゃないか」

などと言いつ出す。兎に角、道だけはやや白く見えるので、その真ん中を歩いて進んで行けば間違いない。闇の中で何だか動くものがある。近寄って見ると非常警報でこんな山の中でも部落の入口に頑張っている女達だ。しばらく行くと、突然眼と鼻の先から「シュー」と言う声がある。吃驚して避けたとたん黒い大きいものが現れる。馬だ。この叱声は馬に言ったのか人間に当たったのか判らない。しかし「咄嗟に気が利いている」と苦笑しながら考える。

槌井の入口までやっと辿り着いた頃、非常管制解除の報が鳴る。しかし闇はとれない。真っ暗な闇の中を手探りにも等しい有様で旅館に着く。磯谷氏達と別れる。湯にはいつて飯を食い、蚊帳をつり、寝床に入る。疲れたが仕事かうまく行って気持ちがいい。明日は一番のバスで帰ろうと相談して、電灯を消して眠る。